

井伏鱒二と常民

——「朽助のゐる谷間」「川」を中心に——

横山信幸

この文章のめざすところは、「朽助のゐる谷間」「川」などの作品をとおして、井伏氏はなぜ「常民」とかかわるのか、またどうかかわり方をしているのかということをも、明らかにすることにある。

人はだれでも、かつて自分が幼なかつたころの思い出をなつかしく思い浮かべるときがあるにちがいない。それは場合により母親の思い出であったり、あるいはまた村の祭りや村人の生活についての思い出であったりするであろう。

もしその人がいわゆる有識階級に属する人間であったとすれば、彼にとつて村の祭りとか村人の生活についての思い出は特別な意味をもってくるはずである。そこはかつて彼が生活していたところであり、その一員としてしかるべき場所を留めていたところである。ところが彼は教育を受け、知識を得ることとひきかえに、常民としての生活をおくることを断念した。それは個としての自己を確立するための道であつたかもしれないが、そのためにかれが失つたものは、共同体の中に埋没することの至福感であつた。

彼は失つた村の生活をなつかしむかもしれない。しかし人は「なつかしむ」といった感情からだけでは、けつして自分のすべてをかけてそれにかかわることはしないであろう。人がおのれのすべてをかけるためには、それのみあうだけの意義を対象のうちに見出すことが必要である。そしてそれにかかわりたいという強い内的衝動からられること。それが自分と常民とを結ぶための条件でもある。

井伏氏はいうまでもなく有識階級の一員である。そういう氏が「朽助のゐる谷間」や「丹下氏邸」の「エイ」などにかかわるためには、氏のうちにいかなるドラマが必要であつたか。まずそれをみてゆきたい。

井伏氏の思想は「山椒魚」や「炭鑛地帯病院」のドクトル・ケーテーのことはからうかがうことができる。

「山椒魚」にみられる氏の思想は、△彼は彼の棲家である岩屋から外へ出てみようとしたのであるが、頭が出口につかへて外に出ることができなかったのである。▽という一文にこめられている。「岩屋」とはもちろん「現実」の譬である。井伏氏は「現実」をいかにしても突き破れぬ堅固なもの、あるいは自分の力およばぬものとしてみていたに違いない。そういうなかで山椒魚にできることといえは△深い歎息をもらした▽、△自身のことを譬へばブリキの切屑であると思つた▽、△ああ、寒いほど獨りぼつちだ！▽と呟いたりすることぐらいである。

これとはぼ同じ思想が「炭鑛地帯病院」でも語られている。主人に手ごめにされて脊椎の骨髓炎をおこし△惨憺たる苦しみのうちに死んで行つた少女や、大きな鉱石に圧しつぶされて△ロールをかけた巨大なし鳥賊▽のようになった労働者を診断したドクトル・ケーテーは次のようにいう。

△私はかういふ話を社會問題にしようとお話してゐるわけではありません。問題になるべき多くの材料はこの現實にはすでに有りあまつてゐる筈です。譬へば、コップに水を一ぱい入れてみたとすれば、水はあふれ出ようとします。それを水の表面張力がうまく調節してゐます。現實での場合、表面張力とは何だと思ひますか。それは私達の虚偽や弱さです。▽

井伏氏が人間の虚偽や弱さに気づき、それゆゑこの現実を自分の力ではどうすることもできない岩屋みたいなものだと思つた過程をわたしたちは知らない。しかし、ともかく、これがこの世の厳然たる事実であるとしてみれば、

状況がどうにもならないものだと思つたとき、人はどのように心を動かすかということがここによく表われている。人は新しい状況に対して、その意味を尋ねたり驚いたることなく、すべてを了解したことにしてそのまま受け入れてしまう。また、ダム建設に反対しきれぬものを悟つたとき、朽助は積極的に新しい状況を受け入れるべく、無理にも心楽しくなる光景を想像してみるのがある。

△そして禿げ頭は、もしも白髭と仲が悪くなかつたら、こんなに律儀に利息を送らなかつたであらう。禿げ頭は今最早、正確に利息を支拂ふことによつて彼自身、唯一の優越を感じてゐる△（「川」）

△「朽助ノ青い實も落ちてしまふぞ」
「平氣ですがな。もそつと落してやれ。」

彼は再び枝をゆすりはじめた。窓を明けてみると、朽助は杏の木に登つて、枝にまたがり、自分の重みを前後に動かしながら杏の木に對しては痛々しいまでに枝をゆさぶつてゐたのである△（朽助のゐる谷間）

これは、状況に対する常民の抵抗の方法である。彼らは決して状況そのものを変革しようとはしない。彼らは、自分自身や、自分の愛しているものを痛めつける、といった自虐的な方法をとることによつて、状況に対する鬱憤をほらそうとするのである。そしてそれさえできぬものは、「地球めだま」の老人のごとく入すでに半世紀以前から、この窓にのぞいて始終これと同じことを呟きつづけてゐるしかない。

これが現実を「大地」のごとく動かすことのできないものと考へた常民の生き方であった。現実を「岩屋」にたとへた井伏氏によつて、このような常民の生き方は、自分自身を映す鏡のようなものであつたにちがいない。常民のもついやらしさもその生活の素晴らしさも、楽しさも悲しみも、井伏氏によつてはみんな自分のそれとつながるものとして見る事ができたにちがいない。

四

しかし、いかに井伏氏の思想と常民の世界観とが似ているからといっても、それは完全に重なり合うほど同じものであるか。たとえば「丹下氏邸」のエイが八どのやうにも私らは、なるやうにしかならんでありませう。所詮は、屈はカゼですがな。△と呟くとき、これはエイの世観観といつてもよい。ただし、エ

イは次の日には「私らは努力しだいでなりたいたいようになるでしょう。所詮は屈は尻でした。」と言うかもしれない可能性を多分に秘めているのである。つまり常民にとつては、目先の状況が変われば、それまでの世界観はいっぺんにひっくり返るのである。彼らにとつてはそれは矛盾でもなんでもない。それは生きてゆくために発した、ごく自然なことばの一部である。世界観というより処世訓とよんだ方がより適切かもしれない。

ところが、同じセリフを井伏氏がしゃべつたとすれば、事態は全く異つてくる。八どのやうにも私らは、なるやうにしかならんでありませう△と井伏氏と言つたとすれば、それは井伏氏の「思想」となる。そしてこれは「処世訓」ではないのだから、明日になつてもこのことばが変わる可能性はほとんどない。もし変わったとすれば、それは「転向」とよばれるべきものである。これは井伏氏が有識階級とよばれるものに属する一員であり、エイが「大衆」とよばれる階層の一員であるという根源的なところから発する問題である。それゆゑ井伏氏がいかにエイの悲しみを共有でき、エイに近づいていったとしても、氏が知識人として存在するかぎりついに越えることのできない一線があるはずである。その「すきま」は、作品においては「私」なる人物と常民との関係となつてあらわれている。これについては（五）でみてゆくことにして、ここではまず知識人の役割について考えてみよう。

大衆にとつては、自分がその中で生活をおくつているところの社会体制が岩のように堅牢であるいはもろかるうが、とにかく生き抜いて行くことができたならそれでいいのである。ところが知識人が、「この世界は岩のように動かしがたい」と認識したならば、彼はその認識に普遍性と有効性をもたせるべく自身の「思想」を構築してゆかなければならない。武田泰淳氏は八山椒魚の思想を紹介し、これを検討しても何の役に立つと言ふのか。△といつては、山椒魚が自己の思想を構築してゆくことを否定するならば、彼は自分の知識階級人としての存在そのものを否定することになってしまうのである。山椒魚は自分の全存在をかけてその思想を構築し、紹介し、そして人々の検討をうけなければならぬ。武田氏も、現に有識階級の一員として存在しているのであり、そして、それ以外の何者でもない。

常民とのまじわりをとおして構築された思想は、普遍性と有効性をもつ。その

ときも思想を構築しようとする主体が常民の中に埋没してしまふならそれは普通性をもたぬ思想になつてしまふであらう。反対に、浮きあがつてしまふそれは知識人の自己満足、つまり有効性をもたぬ思想となつてしまふ。常民の根をおろした生き方の中からさまざまな意味をひき出し、それを自己の思想を構築するための糧とすること、ここに知識人のとらねばならぬ道がある。これを井伏氏の作品のなかでみるとすれば、いささか単純化した見方になるかもしれないが、知識人として登場する「私」と、大衆として登場する諸々の作中人物たちとは、いかなる関係で触れ合っているか、ということを検討することになる。

五

井伏氏は、常民とどうかかわり方をしているか。それを井伏氏の作品に屢々登場する「私」なる人物と、常民との関係から考えてゆきたい。

まず「丹下氏邸」をみてみよう。

△私は気がついた。それは雇人の特色ある折檻のされかたをのぞき見して、私が丹下氏に對して良い感じを持たなくなつたと自分で定めてゐることに気がついたのである。▽

これはこの作品において「私」が他の人物に對して下すほとんど唯一の評価であるといつてよい。しかるに、「私」が丹下氏に對してとつた態度といへば、

△そこで私は反つぽを向いた氣持で云つた。

「あの手紙には、苛酷な刑罰のことが書いてありました」▽

というたつたこれだけのことである。そしてそれ以上には動かない。もちろんエィに對しても「私」はほとんどかかわつてはいない。なぜか。

次の文章は、オタツがエィのところへ訪ねてきたときのことを書いたものである。

△彼女はそれ（土産のこと―横山）を踏石の上に置き、目や口や頬に満腔の敬意を示しながら丹下氏に挨拶した。それは手の先が腫までとどくほど上體をかかめる姿勢を繰返しながら、静かに唱歌をうたふやうにリズムミカルな口調で、時候のよし悪しから述べはじめの挨拶なのであつた。丹下氏も、ほとんど彼女と同じやうな言葉でもつて應待した。▽

△オタツは丹下氏との挨拶が終わると、次は私に挨拶した。（略）彼女は私にも、丹下氏に挨拶した場合と同一のことを告げた。私はどう言つて答えたら

いか迷ひながら、彼女の唱歌の合間ごとに、當家の男衆は實に健康で結構なことであると云つた。▽

彼女の挨拶のことは一つにも、自己の占めるべき場所からはずれぬようにその位置を測定しながら世間と交わりを結んでいかなければならぬ常民の生活の、長い長い伝統が横たわっているのである。そして「私」のみせたこの「迷ひ」こそ、すでに「私」が常民とはちがった階層の世界に住んでゐることの証しである。もし「私」が彼女らと同じ「大衆」とよばれる階層で生活をしてゐたならば、「私」もまたリズムミカルな唱歌をうたうやうな口調で、何の苦もなく挨拶を返せたにちがいない。

次に、「私」と常民とのかかわり方をを、「朽助のゐる谷間」でみてみたい。

△――私は彼のたつた一人の教へ子である。二十年前、リーダーの三の巻が終了した時、彼は教へ子に對して次のように語つたのである。

「若しあなたが立身せなんだら、私はいつそうつらいですが。そんなめに逢うほどならば、私はなんぼうにもつらいですが。」

私はそのとき頭がしびれたと思つた。そして歸らうと思つて外に出ると、いつの間にか降りだしたのか、雪が谷底にも峰にも一ぱい降り積つてゐた。▽美しい場面である。「私」が朽助と世界を共有してゐた時代の幸福な思い出である。「私」をして「技師」とか「歯科医」とか「弁護士」に「立身」させることが朽助のねがいであり、そしてまた「私」の未来でもあつた幸せな時代の話である。そして「私」は「立身」し、常民としての階層から離脱したが、はたしてそれは「私」にとつて、あるいは朽助にとつて幸福なことであつたかどうか。それはなによりもこの物語りのなりゆきがよく語つてゐる。

ダム建設のためやがて水没するかれの小屋から立ち退きを求められた朽助は、寢床に入った「私」に對して、この「しぐれ谷」の山鳥や雉子にまつわる思い出をひとり綿々として語り倦むところをしらさない。そして、△ああはや、なんぼうにも咎れがす▽と△深い歎息をもらし▽、△突然はげしい涙の發作にかられたのである▽。こういう老人の悲しみに對して「私」がとつた態度といへば、△私の目からも多少の涙の点滴であつた▽ということぐらゐであり、さらに△私には老人の悲歎をいかにして救つていいかを考へつくことができなかったで、再び價の軒をかきはじめてみた▽ということであつた。つまり「私」は、立ち退き

を悲しむ朽助へ、具体的實際的でないかなる救助の手をもさしのべてはいないの
ある。「私」ができることといえば朽助の悲しみを理解することだけである。

いっぽう朽助のほうは「私」にどんな期待を持っているのだろうか。

△所詮は立ち退くのでせうがな／＼あははや、立ち退かずばなるまいでせうが
な／＼昨夜あんたにさとしてもらつたる通り、私は新しき闘争とかたら、も
うやめたる▽

△したれども、私らは、あんたが利権擁護たらの演説をみんなの前でやると
ころが見たいがす。私らも、あんたが流暢な演説をこころは、またと
見られんぢやろと思ひますがな。▽

朽助が「私」の演説を見たいというのは、自分の身内の出世した姿を誇りに思ひ
たいからであつて、現在の自分の窮状が「私」によって救われると思つてゐるか
らではない。朽助が、「私」にはこういう事態にかかわるだけの力はないと認め
てゐることは、△所詮は立ち退くのでせうがな／＼という彼の歎息からでもわか
る。「私」はエイにもオタツにも朽助にもどつともかかわつてはいないし、
彼らもまた「私」にどのような期待をもよせようとはしてはいない。

なぜ「私」と彼らはお互いにすれちがつてしまふのか。なぜ正面から絡み合つ
ことができないのか。それは朽助らの望むものと、「私」の持つてゐるものが
異つてゐるからである。朽助やエイにいま必要なものは、この事態を動かす具
体的な力である。しかし「私」には、直接現実を動かすような力はない。いま「私」
がもつてゐるはずのものは、いわゆる思想とよばれるものでしかないのである。
それでは「私」は朽助らに対して、いつまでも徹底的に無力であるしかないのだ
らうか。いやそうではない。もし知識人としての「私」の構築した思想が本物で
あるならば、それはいつか必ず現実に対して有効性を発揮するはずである。そ
れは必ず具体的な力となつて朽助らの求めるものを充たすにちがいない。すぐ
れた思想には必ずそれだけの力がある。

ところがもし、その思想が有効性をもたないものであれば、それは必ず常民
からは仕返しをうける。たとえば「川」のなかの次の部分のように。

△……あたしに危害を加へないで下さい／＼あたしは精神的にも肉體的にも疲
勞してゐます。あの惨めな思ひ出ばかり多い分工場で、あたしは勞役にこき

つかはれ、さうしてその擧句に、すべて彼等に搾取されつくされたあたしの
残骸があつたばかりです。そして、あたしは身寄りの一人もない不幸な人間
なのです。▽

これは多田オタキという女工が、吉岡という男に手荒なことをされようとしたと
き発したことばである。これについて村人はつぎのように反応する。

△これまでの経験によれば、人びとは女に對して手荒なことをしようとし
たとき、そんな大げさな演説口調をきいたことがない。(略)そこで人びと
は多田オタキのことを、立身出世して帰郷して来た奴であると無理やりに信
じた。▽

オタキのことばの中味はかなり深刻なものであるが、それは人々の心をうたな
かつた。そればかりか、それは立身出世した人の語ることばであるとさえおもひこ
まれたのである。これはオタキの思想への痛烈な批判である。こういう事態に陥
つたとき、このセリフに含まれた思想は、ここで死んでしまつたのである。つま
り、△彼等に搾取されつくされたあたしの残骸があつたばかりです▽という世界
の認識のしかたは、常民の生活のなかにおろされたとき、その有効性を失つてし
まつたのである。思想はこのようにして試されなければならぬ。

ともかく、「私」は、「現実を動かす具体的な力」という観点にたてば、どの
ようにも朽助やエイにかかわつてはいない。それでは思想ではどうか。「私」は
有効なる思想を構築し、それでもつてかれらにかかわつてゐるか。そしておのれ
の思想の有効性を、オタキの思想が村人の前にさらされたと同じように、朽助や
エイの前にさらすことによつて確かめようとしてゐるか。残念ながら、
「私」は常民にたいして、彼らの悲しみを理解するという以上には、どのよう
にもかかわつてはいないのである。「私」は、単に常民の世界を覗きこむために井
伏氏によつて設定された「のぞき窓」にはかならないのである。これが「私」の
限界であり、また井伏氏の作品の登場人物が織り成すドラマの限界でもあると考
えられる。

六

タエトという少女がいる。「朽助のある谷間」に登場する人物だが、朽助と
「私」との間にはさまれた彼女の存在は、ひじょうに興味深いものである。彼女

はい。どのよう役割をはたしているのだろうか。そしてどのような可能性を秘めているのだろうか。

この谷間からどうしても立ち退かなければならなくなったとき、朽助のどつた行動は、八杏の木に對しては痛々しいまでに枝をゆさぶつたり、八突然はげしい涙の發作にかられた、椀の木に群がっている毛虫にむかって八「私らは四五日すれば立ち退きぢや。したれども、この毛蟲らはそれまでには蝶々になれぬぢやろ」Vと悪態をついたりすることでしかなかった。いっぽう「私」も朽助と同じく、この事態に對処すべき術を知らなかったのである。

タエトはどうしたか。彼女は「私」に次のような手紙をよこしている。

八池は日本政府が許可し命令してつくつてゐるのであります故、私どもは立退きに反對することを許されないのですけれど、祖父は如何なることがあつても立ち退かないと反對いたします。(略)どうか御手紙にて祖父を説き伏せて下さいV

彼女は歎息したり自暴自棄になつてゐる朽助とちがつて、自分たちのおかれてゐる状況をはつきりとつかんでゐる。そしてこれにどう對処しなければならぬかということもしつかりと心得てゐる。事態はまさしく彼女が認めたとおりであり、予測したとおりに展開するのである。そして結局、朽助の家は水没するのであるが、その光景をみつめていた朽助は人なれたるむごたらしいことをする池ぢやろかVと呟き、次のような反応をおこす。

八朽助は足を半ば投げ出して、その脛の上に額をのせ、思ひついたやうに歎息をもらしはじめた。深く息を吸ひ込んで、一気に肩で押し出すといふやりかたであつた。その度ごとに彼は咽喉からひと思ひにくつたくした思想を乗てようとしてゐるらしかつた。吐き出した息と吸ひ込んだ息との語尾は、彼の五體の感傷にくすぐられて小刻みにふるへてゐた。ところが、それは次第に老人のすすり泣きに變つて行つたのである。V

このような不幸のどん底にある老人に對して「私」のどつた態度といへば、八私には疲勞を覚えてゐたので、しばらく立ち上りたくないと思つたVということではなかつた。ところがタエトは、八私達の立ち上るのを待ちつづけて、滅多なことには朽助を堤防の上に置き去りにしないといふ意気込みを蒼色の瞳に現はしてゐたVのである。この老人にやさしくかわりあい、この老人をなぐさめること

ができるのは、けつして「私」なんかではなく、日本人でもアメリカ人でもない混血の一少女であつた。

これはきわめて象徴的なことである。状況を正確に判断することができ、常民にやさしくかわることができたのは、八東京に住んでゐる八文學青年Vでもなく、また村人たちでもなく、祖国をもたないそれゆえに朽助からも「私」からも自由な存在である八日本人の心を真似Vた一少女であつたのだ。わたしたちはこのことをどのように考えたらいいのだろうか。もちろんこのことは、祖国をもたない少女ならばいつもやさしく常民にかかわることができるといふことを意味してはいない。タエトが朽助にやさしくかわることができたのは、彼女が八メリヤスのシャツとパンツだけの服装Vで寝床に入つたり、八まぶしい太陽に目を細くしながら藍を刈りとりつたりする生活をもつてゐるからであるV。意識は常民から自由であり、その足はしっかりと常民としての生活の中に根をおろしてゐる、こつうあり方のできる人間の中にこそ常民を幸福にできる可能性がひそんでゐるのである。それゆえ井伏氏のその後の作品は、タエトのもつ可能性の追求にこそさざげられるべきであつたといえるかもしれない。

しかしタエトに全く問題がないわけではない。それは状況を常に正確につかむ力をどうやって身につけるかということであり、その世界観にどの程度の普遍性を与えることができるか、ということである。もしこれが充分にできないということになると、彼女は単なる「世話役」でしかなくなる。そして「世話役」なるものが常民の生活に与える影響は、知識人のそれとは比べものにならないほど大きいものである以上、タエトは誤ちをおかすことは絶対に許されない。そのためにはタエトもまた、教育をうけ知識を身につけるといふ「私」と似た道を歩まねばならないであらう。そうなつたとき彼女が忘れてならないこと、それは八まぶしい太陽に目を細くしながら藍Vや八綿Vを收穫することである。

注1 「常民」とは民俗学で使われる用語である。それを使用したのは、

井伏氏の作品に登場する諸々の人物たちを指し示す語として、大衆・民衆・庶民などということばよりも適切であると思はれるからである。「朽助」や「エイ」、また「多田オタキ」などを「庶民」という語でよぶことが多い。

しかし「庶民」という語は八床屋や魚屋や学生などの文化的エネルギーをも

たない階層V(杉浦明平「井伏鱒二」)をもさす。「朽助」や「エイ」は明らかにこれらの階層とはちがった場所にいる。常民とは人日常のサイクルを放棄しない人たちVであり、大地に根をもつ直接生産者Vであり、人觀念の世界ときっぱり手を切って生きる生活者V(谷川健一「常民への照射」)であるとするならば、まさしく「朽助」や「エイ」は「常民」とよばれるにふさわしい人物であろう。

2 「川」

3 「井伏鱒二論」

4 「多基古村」がこのような作品である。

5 そういう力を持っているものとすればそれは、支配者層とよばれる階層である。しかし彼らは直接にはその力を持ってない。彼らに力を与えるのは常民である。常民の中にこそ現実を動かす力が潜在する。